鎌倉の埋蔵文化財 27

Buried Cultural Properties in Kamakura 27

令和４年度発掘調査の概要

令和６年（2024）３月

鎌倉市教育委員会

～ごあいさつ～

私たちが暮らす鎌倉市は、源頼朝が武家による政治をはじめた地として知られ、その地下には鎌倉時代の町なみをはじめとして、旧石器時代から江戸時代に至る人々の生活の痕跡が埋蔵文化財として残っています。

これらの埋蔵文化財は、家屋の建築や、開発事業などの土木工事により失われてしまうことも少なくありません。貴重な歴史的遺産が失われてしまうことにもつながりますが、現代に生きる私たちが生活を営んでいく上では避けられないことでもあります。

このように、やむを得ず失われることとなる埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その調査成果と記録を着実に積み重ねて検証していくことで、鎌倉の歩んできた歴史の解明につながっていきます。

鎌倉市教育委員会では、発掘調査関係者のご協力を得ながら、この『鎌倉の埋蔵文化財』の発行等により、発掘調査の成果を紹介し、また、鎌倉歴史文化交流館等でも出土資料の展示を行っています。これからも、市民をはじめとする皆さまの歴史への理解が深まるよう、様々なかたちで発掘調査の成果を公開してまいりますので、文化財の保護に対するご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

～目　次～

1　大倉幕府周辺遺跡群　（雪ノ下三丁目660番 3 他 9 筆）…… 1
2　若宮大路周辺遺跡群　（雪ノ下一丁目120番 1 の一部）…… 3
3　小町大路東遺跡　（大町一丁目1174番、1175番 1 ）…… 6
4　若宮大路周辺遺跡群　（雪ノ下一丁目209番 4 ）…… 8
5　若宮大路周辺遺跡群　（御成町763番 4 の一部）…… 9
6　若宮大路周辺遺跡群出土の白磁壷…… 11
英文要旨…… 12

～例　言～

1．本書は令和 4 年度に市内で実施された発掘調査の概要を中心に掲載しました。
2．本書は鎌倉市教育委員会文化財課が作成しました。
3．本書の作成にあたり株式会社斎藤建設、株式会社博通、一般社団法人中世・鎌倉文化研究センター、龍谷大学 教授 北野信彦氏のご協力をいただきました。
4．鎌倉市教育委員会が刊行した発掘調査報告書は奈良文化財研究所データベース「全国遺跡報告総覧」で閲覧することができます。

《表紙写真》 大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目660番 3 他 9 筆）5 区全景写真（南から）。南北に柱の穴が一直線に並び、柵の痕跡と考えられます。この柱の穴に重複して、直径 1 mを超える大型の柱穴が発見されました。これらは大倉御所の関連施設とも考えられる貴重な発見です。

1．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目660番３他９筆）

Okura-Bakufu-Shuhen-Isekigun Site

源氏三代の御所―大倉幕府―の関連施設か

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小・中学校の構内で、令和２年度から令和５年度まで、公共下水道改修工事に伴う発掘調査を実施し、鎌倉時代前期から室町時代にいたる重層的な遺跡が発見されています。ここでは、令和５年度の調査時に発見された鎌倉時代の遺構について、紹介します。

現在の小学校校舎の東に位置する第５区とした調査区では、直線に並ぶ柱穴や直径１ｍを超える大型の柱穴と、道路と考えられる泥岩を突き固めた地面が発見されました。本調査区の位置は源氏三代が政務を執り行った御所―大倉幕府―の西端と推定されており、南北方向に直線に並ぶ柱穴は、御所の西側を囲む柵の痕跡の可能性があります。また、その柵と重複するように大型の柱穴が５穴発見されています。この５穴には、柱の沈下を防止する板や石が据えられており、相当の重量がかかる構造物の柱穴であったことが推定されます。柵との重複状況や、柱穴の規模や構造から、門の柱穴と推定され、現在の周辺の地名である「西御門」の由来となった御所の西門の遺構であった可能性があります。この柵や門の西側では、丁寧に突き固められた地面が見つかっており、これは御所の西側を南北に延びる道路と推定されます。古文書には、大倉御所の西側に「西大路」が通っていたと記されており、発見された道路遺構がそれにあたるのかもしれません。ただし、出土遺物をつぶさに観察すると、これらの遺構が埋まった年代は13世紀中頃と考えられるため、嘉暦元年（1225年）に御所が移転した後の施設であった可能性もあります。

写真１　５穴の大型の柱穴（東から）

(photo 1) Five large pillar holes (from the east)

写真２　大型の柱穴の底に据えられた礎板と礎石（東から）
(photo 2) Base plates and foundation stones placed at the bottom of a large pillar hole (from the east)

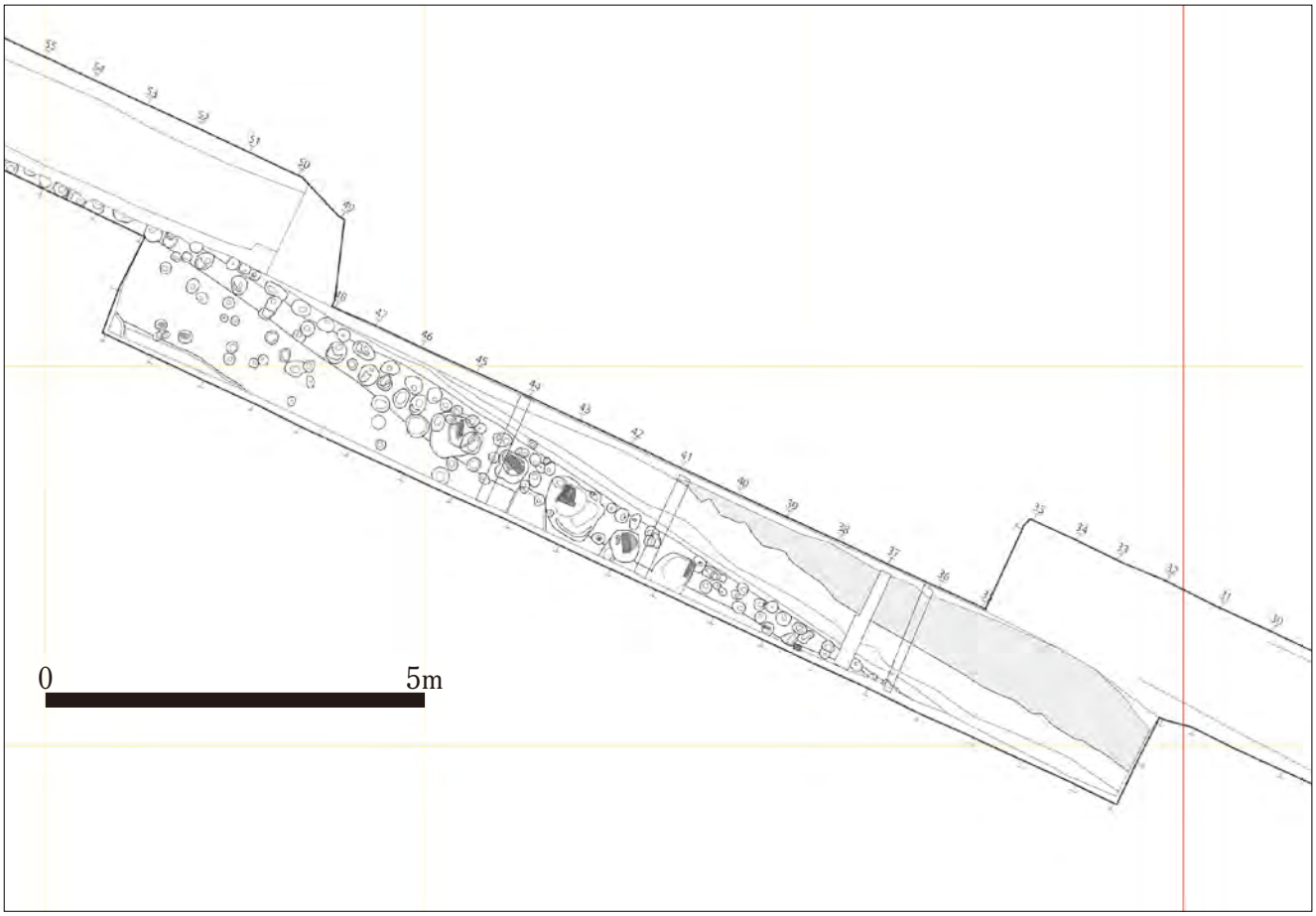


写真３　６区実測図（上が西）
(photo 3) Survey map of Section 6

2．若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目120番１の一部）

Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site

職人の活動場所か

ここでは隣接した二つの発掘調査地点の概要を併せてご紹介します。調査地点は窟堂の南方約100m、扇川右岸にあります。

西側調査区の室町時代（15世紀）の地層からは、大きく東へ傾斜する遺構が発見され、これが当時の扇川の流路と考えられます。より下層の南北朝時代や鎌倉時代の層では発見されなかったため、その頃の流路は、さらに東側であった可能性があります。鎌倉時代中頃から南北朝時代の生活面では、板壁掘立柱建物と呼ばれる簡素なつくりの建物が発見されています。発見された建物の向きは、現在の道路の方向とほぼ一致しており、当時の町割り（街区）が、現代まで踏襲されていることが分かります。

東側の調査区では、一辺３ｍ程度の半地下式で、隅に囲炉裏が付属する建物があり、囲炉裏は一辺50㎝以上で、横板によって四角く囲われた範囲に墨灰が充填され、横板の上端は焼け焦げていました。囲炉裏では暖を取ったり、調理をした、と考えられますので、この建物が住居や作業場として利用されていたことを示唆します。

出土遺物は、銅細工や織物に関係する遺物が出土しています。特に銅製品は800年前のものとは思えないほど光り輝き、非常に良好な状態で出土しています。また木像人物像や漆蒔絵蓋などは、鎌倉でも数少ない稀有な出土遺物です。

写真４　囲炉裏を有する建物

(photo 4) Building with an *irori* hearth

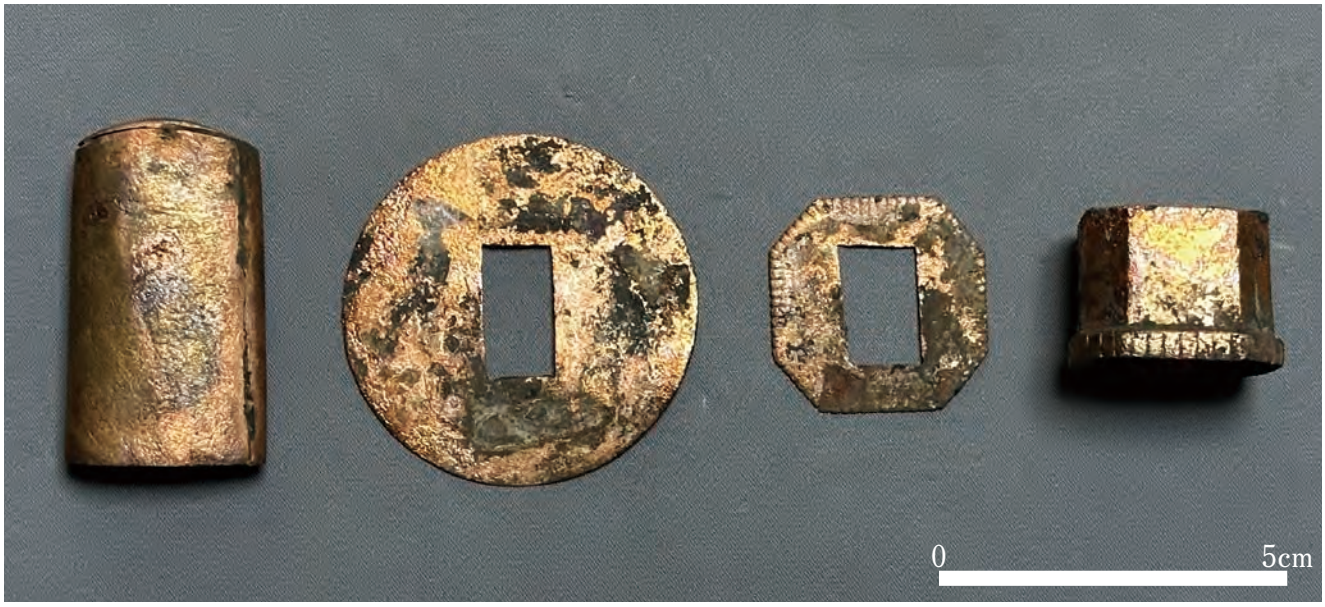


写真５　出土した銅製品

非常に良い状態で出土しました。他にも紡錘車や釘隠しとみられる銅金具等が出土しており、銅細工に関わった職人工房があったのかもしれません。

(photo 5) Copper items that were excavated. These were excavated in pristine condition. In addition to these, copper fittings believed to be spindle bases and nail covers and other items were excavated, suggesting that there was a craftsman's workshop involved in coppersmithing.

写真６　蒔絵蓋

鏡箱の蓋か。群像として四羽の鳥がモチーフとなった風景が描かれています。鳥の身体は白鑞（ひゃくろう）（錫と鉛の合金）で、足等は金でそれぞれ蒔絵が施されており、羽毛の表現まで非常に精細な細工が施されています。

(photo 6) A *makie* lacquer cover. Likely the cover to a mirror box. Depicts a landscape with a flock of four-winged birds as its motif. The bodies of the birds are made of white solder (a compound of tin and lead). Their legs and other parts are made of gold. Both are adorned with *makie* lacquer. Even the presentation of the feathers exhibits extremely fine craftsmanship.

木像人物像か、神像か

この調査地点では、注目すべき木製の人物像が鎌倉時代の層から出土しました。大きさは高さ約18cm、幅約８cmと手のひらにのるサイズです。頭は差し込み式の別材で造られており、左手は別材を接ぐようです。男性装束姿で、冠を戴き、何かにまたがる姿勢をとります。足元は鐙（あぶみ）を履いているように見えます。鐙（あぶみ）は馬具なので、馬にまたがっているのであれば「騎馬像」となります。これが男性人物像か、神像等なのか、装束姿で騎馬像といえば「八幡神像」が思い起こされますが、今後検討が必要です。

顔の表現は緻密で、あたかもモデルがいたようにも思えます。モデルは、神仏か、依頼主か、当時の権力者か、はたまた想像で造られた表情なのか、疑問は尽きません。

写真７　木造人物像
(photo 7) Wooden figure

写真８　木造人物像頭部拡大
(photo 8) Magnification of head area of wooden figure

写真９　木造人物像の三次元スキャン画像
(photo 9) 3D-scanned image of wooden figure

3．小町大路東遺跡（大町一丁目1174番、1175番１）

Komachi-Oji-Higashi-Iseki Site

鎌倉時代の小町大路と側溝

大町四つ角から北に約100m、小町大路の東に面するこの調査地点では、平安時代中期から鎌倉時代の遺跡が見つかっています。最古の遺構は平安時代中期の竪穴建物で、８世紀ごろの暗文のある土師器盤状坏が出土しています。建物の規模などは、大半が調査区外へ延びるため未詳な部分もありますが、平面形一辺４ｍ前後、深さ50㎝以上の竪穴建物と推定されます。

この遺跡で注目されるのは、平安時代末期以降から鎌倉時代にかけての、小町大路とその側溝が発見されたことです。鎌倉時代初期の小町大路は目立った舗装は見られず、往来によって硬化した路面が発見されました。その後も小町大路は方向を変えず、何層にもわたって、凝灰岩を突き固めた舗装で造られていました。東側には溝が掘り込まれており、これが小町大路の側溝と考えられます。側溝は断面形状が四角形で、幅約１ｍ前後、深さ約75㎝と、若宮大路の側溝と比べると小規模です。溝の両側面には横板が杭で留められていました。これも若宮大路の側溝とは異なる工法が採用されています。

写真 10　調査区全景写真（北から）　右側が小町大路、中央の溝が小町大路側溝

(photo 10) Panoramic photo of survey area (from the north) To the right is Komachi-Oji Street. The groove in the center is the street's ditch.

写真 11　小町大路側溝の側板（南から）　板上端が焼け焦げており、火災にあったことが分かります

(photo 11) Side plates in the Komachi-Oji Street ditch (from the south).
The upper edges of the plates are scorched, indicating that they were subject to a fire.

写真 12　出土したイルカの頭骨とかわらけ

(photo 12) Excavated dolphin cranial bone and *kawarake* unglazed earthenware

4．若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目209番４）

Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site

鎌倉時代の街区と建物

調査地点は鶴岡八幡宮から南西に約290mに位置しています。13世紀後半から14世紀前半の鎌倉時代後半頃の道路と生活面が見つかりました。道路は泥岩を敷いて突き固めて造られており、東西方向に延びています。幅や規模を少しずつ変えながら、５回造り替えられたことが確認でき、長い間使われていたようです。時期によっては簡素な木組み側溝や土留めが付属していますが、これらの規模や構造が粗雑であるため、大規模な道路ではなく敷地内の通路と考えられます。

道路の両脇には囲炉裏の跡や土間の様に固くなっているところがあり、焼け焦げた柱材も見つかっていることから、建物があったと考えられます。

周辺の調査地点でも規模の小さな道路遺構が見つかっているので、鎌倉時代後半のこの辺りは路地によって区画が細かく分けられた地域だったようです。

写真 13　発見された囲炉裏
(photo 13) Discovered *irori* hearth

写真 14　鎌倉時代の路地と溝と建物
(photo 14) Alley, ditch and building in the Kamakura period

5．若宮大路周辺遺跡群（御成町763番４の一部）

Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site

中世と古代の複合遺跡

御成小学校から道路を挟んだ東側で実施された発掘調査では、鎌倉時代の建物跡や古墳時代頃の住居跡、弥生時代の遺構が発見されています。この調査地点と御成小学校の間を通る道路は今小路と呼ばれ、鎌倉から武蔵国（現在の東京都・埼玉県を中心とする旧国名）へ通じる交通の大動脈でした。

この調査地点付近は砂丘が発達しており、鎌倉時代の地面は砂地であったことが分かっています。この調査地点及び周辺の発掘調査では、鎌倉時代後半に砂地を掘り込んだ竪穴建物と呼ばれる建物遺構が多く見つかっています。竪穴建物とは、地面を四角く掘り上げ、そこから木組み構造によって屋根を立ち上げる半地下式の建物で、多くは倉庫であったと考えられています。交通の大動脈であった今小路に接して倉庫が建ち並んでいたことが想定されます。

また、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての常滑焼の大甕が、地面に据えられた状態で発見されました。水甕や酒甕として使われていたのかもしれません。甕は廃棄され埋まった後に、後の建物構築の際に一部が壊されていました。

鎌倉時代の層の下からは、古墳時代頃の竪穴住居址等が発見されています。竪穴住居址の平面形は一辺５ｍほどで、住居の大部分が調査区の外に位置していたため、全体の規模は分かりませんが、建物の北辺に竈が発見され、土師器や須恵器が出土しています。

さらに弥生時代の甕と壺が入れ子状に重なった状態で出土しました。甕や壺の中からは骨などは出土しなかったため、どのような性格の遺構かわかりませんが、葬送やまじないに係る遺構であったのかもしれません。

写真 15　中世遺構の全景写真（上が東）

(photo 15) Panoramic photo of medieval remains (top is east)

写真 16　発見された鎌倉時代の常滑焼の大甕
(photo 16) Discovered large *Tokoname* ware jug from Kamakura period

写真 17　発見された弥生時代の甕と壺
(photo 17) Discovered urns and pots from Yayoi period

6．若宮大路周辺遺跡群出土の白磁壷

Hakuji White Porcelain Pot Excavated at Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site

宋商人のサインが記された壺

この資料は、若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目218番 3 の一部）の発掘調査で出土した、中国産の白磁壺の破片です。壺の底部の破片には、墨で「十綱」と記されています。これは、鎌倉時代に日本と中国（当時は宋）との貿易を行っていた、宋の商人グループのサインと考えられており、鎌倉では初めての出土事例です。

墨書が記された底部片とそれに接合する壺の胴部の破片、それから胎土や釉薬の比較から同一個体と推定される破片が見出しています。壺の胴部下半には蓮の花弁がデザインされ、胴部上半には数条の沈線が巡ります。11世紀末から12世紀前半頃に中国広東省付近で生産されたものと推定されます。底の直径は11㎝以上あり、日本に輸入された白磁壺の中でも、大型の優品であったことが考えられます。

「綱」が記された陶磁器の出土例は、平安時代末から鎌倉時代初期の博多に集中しており、宋の商人が博多で活動していたことばかりではなく、日本と宋の貿易が博多を中心に行われていたことを裏付けます。今回、博多と同種の資料が鎌倉で出土したことは、宋と博多との日宋貿易の延長線上に、鎌倉があったことの証拠といえます。宋から直接、鎌倉へ貿易船が入港した可能性も含め、宋～博多～鎌倉への貿易ルートを示す貴重な資料と言えます。

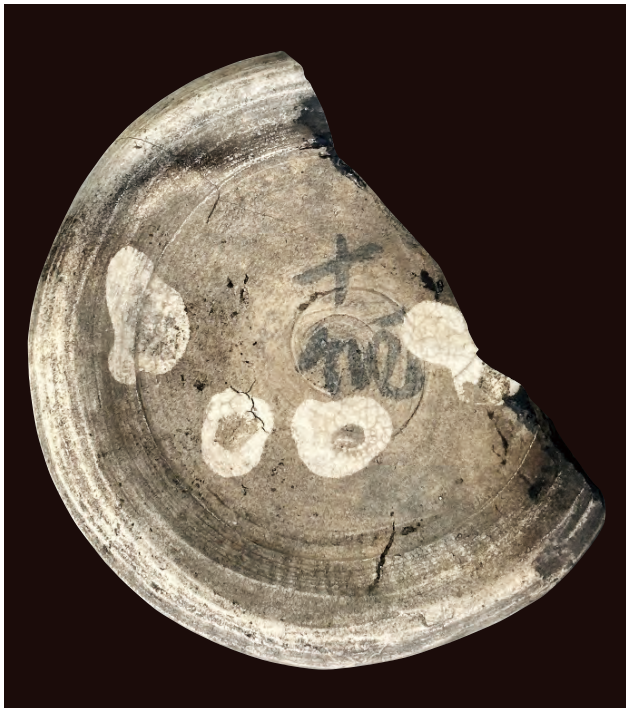


写真 18　出土した白磁壺の底部片

(photo 18) Piece of bottom of excavated *hakuji* white porcelain pot

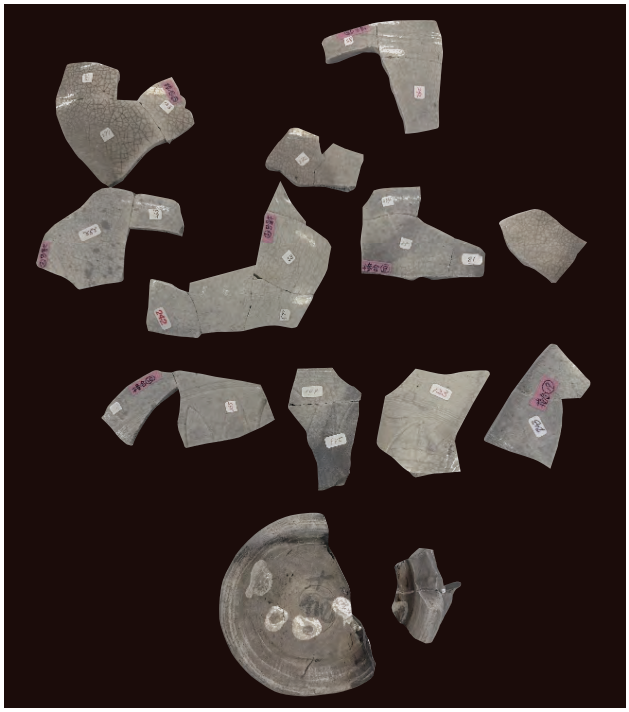


写真 19　同一個体と推定される破片

(photo 19) Fragments surmised to be from same unit

Buried Cultural Properties in Kamakura 27

1 . Okura-Bakufu-Shuhen-Isekigun Site (660-3, Yukinoshita 3-chome and nine other land lots)

On the site of The Kamakura Elementary School & Junior High School Attached to Yokohama National University, excavation surveys accompanying repair and improvement work on the public sewer were carried out between and 2020 and 2023. There, stratified ruins from the early Kamakura period all the way to the Muromachi period. Below is an introduction of the remains from the Kamakura period discovered upon a survey conducted in 2023.

In the survey area designated as Section 6, which is located east of the existing elementary school building, pillar holes arranged in a straight line, large pillar holes with a diameter exceeding 1 m, and ground with tamped mudstone believed to be a road were discovered. The location of this survey area is inferred to be the west end of the Okura Bakufu, a palace where the three generations of Genji administered government affairs. The pillar holes arranged in a straight line running north and south may be the remains of an enclosure surrounding the palace's west side. The five large pillar holes that were also discovered would appear to overlap with that enclosure. Situated in those five holes are plates and stone to prevent the pillars from sinking, suggesting that the pillar holes were for a structure that had considerable weight. Based on their state of overlapping with the enclosure and the size and structure of the pillar holes, they are inferred to be for a gate. It is possible that these are the ruins of the palace's west gate from which "Nishimikado," the current name of the surrounding area, got that name. To the west of this enclosure and gate, carefully tamped ground has been discovered, suggesting that it was a road that extended north and south to the west of the palace. In ancient texts, it is written that "Nishi-Oji," literally "west street," ran along the west side of the Okura palace. The discovered remains of a road may very well be "Nishi-Oji." However, a detailed observation of the excavated relics shows that these remains were likely buried around the mid-13th century. As such, the facility may postdate the relocation of the palace in the first year of the Karoku period, or 1225.

2 . Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site (Part of 120-1, Yukinoshita 1-chome)

Also provided here is an introduction of an overview of two adjacent excavation sites. These sites are located roughly 100m south of the Iwayado stone hall on the right bank of the Ogigawa River.

In the strata of the west-side survey area dating back to the Muromachi period (15th century), remains sloped considerably to the west were discovered, likely making this a flow channel for the Ogigawa River at the time. As these were not discovered in strata further down dating back to the Nambokucho and Kamakura periods, it is possible that the flow channel at the time was located further to the east. In terms of living conditions from around the mid-Kamakura period to the Nambokucho period, board-and-batten buildings, which exhibit a simple construction, were discovered. The direction the discovered buildings face is nearly consistent with the direction of existing roads, illustrating how the model for town planning (blocks) from the time was followed until the modern period.

In the east-side survey area is a semi-underground building roughly 3m on each side accompanied with an *irori* hearth in a corner. This hearth measures more than 50cm on each side. An area surrounded by a square formed with crosscut planks was filled with black ash, and the upper edges of the planks were scorched. This hearth was therefore likely used to keep warm and cook, and as such suggest that the building was used as a residence or a workspace.

The excavated relics were related to coppersmithing and textiles. Of particular note are copper items, whose radiance belied their 800-year existence. These were excavated in pristine shape. Other items such as wooden figures and Japanese *makie* lacquer covers are excavated relics the likes of which are few and far between even in Kamakura.

At this survey site, a wooden figure that merits attention was excavated from stratum dating back to the Kamakura period. This is roughly 18cm in height and 8cm in width, making it palm-sized. Its head is made with a different insertion-type material, and its left hand appears to be grafted using a different material as well. Dressed in male garb and donning a crown, the figure is posed as if it is straddling something. The figure appears to be wearing stirrups on its feet. As bits are used for horse-riding, assuming the figure was straddling a horse, that would make it an equestrian statue. While it is unsure if this figure is of a male or a god, attired equestrian statutes are generally associated with *Hachimanshin* statues. However, this needs to be examined going forward.

The presentation of the figure's face is elaborate, as if it were modeled after someone. That model could have been a god, Buddha, a client, a figure of authority from the time, or even a product of the imagination. The questions are endless.

3 . Komachi-Oji-Higashi-Iseki Site (1174 and 1175-1, Omachi 1-chome)

In this survey site facing east of Komachi-Oji Street, which is located approximately 100m north of Omachi Crossing, ruins dating back between the mid-Heian period and the Kamakura period were found. The oldest remains were of a pit building from the mid-Heian period, from which a patterned *Haji* ware disc-shaped shallow bowl from around the 8th century was unearthed. While some details are elusive due to much of the building extending outside the survey area, it is estimated to be roughly 4m on each side of its planar shape and to have a depth of over 50cm.

The highlight of these ruins is the discovery there of Komachi-Oji Street and its ditch dating from the end of the Heian period up through the Kamakura period. No conspicuous pavement was seen on this street at the onset of the Kamakura period, and the road's surface was found hardened by people coming and going over it. Since then, Komachi-Oji Street continued to be made by tamping tuff over countless layers without

altering the street's direction. The groove dug on the east side of Komachi-Oji Street is believed to be its ditch. With a square cross-section, a width of roughly 1m and a depth of about 75cm, the ditch is small in size compared to its Wakamiya-Oji Street counterpart. On both sides of the grooves, crosscut planks were put in place using stakes. The construction methods used for these also differed from those seen in the Wakamiya-Oji Street ditch.

4. Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site (209-4, Yukinoshita 1-chome)

This survey site is located about 290m southwest of Tsurugaoka Hachimangu. A road and living conditions dating back to around the latter half of the Kamakura period, which falls between the late 13th century and the early 14th century, were discovered here. The road was overlayed and tamped with mudstone, and extends to the east and west. It was confirmed that the road was rebuilt five times, which its width and size modified little by little. It would therefore appear to have been used over a long period of time. The road was accompanied by a ditch and earth retainers depending on the period. However, as the size and structure of these were crude, the road was likely a path within a site rather than a large-scale road.

Both sides of the road contain remnants of *irori* hearths and hardened areas not unlike earthen floors. Additionally, scorched pillar members were also found. Based on this, buildings were likely located there.

As small-sized remains of roads were also discovered in surrounding survey sites, it would appear that this area in the latter Kamakura period was precisely zoned with the use of alleys.

5. Wakamiya-Shuhen-Isekigun Site (Part of 763-4, Onarimachi)

Through this excavation that was carried out on the east side of Onari Elementary School across the road, traces of buildings from the Kamakura period and residences from around the Tumulus period as well as remains from the Yayoi period were discovered. The road running between this survey site and Onari Elementary School, called Ima-Koji Street, was a major transportation artery that connected Kamakura to Musashinokuni (former name of the province mostly consisting of present-day Tokyo and Saitama Prefecture).

Sand dunes have formed in the area nearby this survey site, indicating that the ground during the Kamakura period was sand. At this survey site and surrounding excavation sites, remnants of pit buildings dug into sand in the late Kamakura period were found in large number. Semi-underground structures, pit buildings are built by digging up the ground in a square configuration and erecting a roof above it using a wooden frame structure. It is believed that many of them were used as warehouses, and is supposed that a large number of them lined up next to Ima-Koji Street given its role as a major transportation artery.

Additionally, a large *Tokoname* ware jug dated back from the end of the Kamakura period up through the Nambokucho period was found placed in the ground. It may have been used as a water pail or *sake* jug. After the jug was disposed of and buried, part of it was destroyed when a building was subsequently erected.

From below the strata dating to the Kamakura period, items such as pit dwelling sites from around the Tumulus era were discovered. The planar shape of these sites was roughly 5m on each side, with the majority of them located outside of the survey area. For that reason, while its overall size is unknown, a *kamado* cooking furnace was found on the north side of the building from which *Haji* ware and *Sue* ware were excavated.

Furthermore, urns and pots from the Yayoi period were unearthed while still overlayed in a nested state. As bones and such were not excavated from those urns and pots, it is unknown what the nature of the remains are. One possibility is that they are related to funerals or incantations.

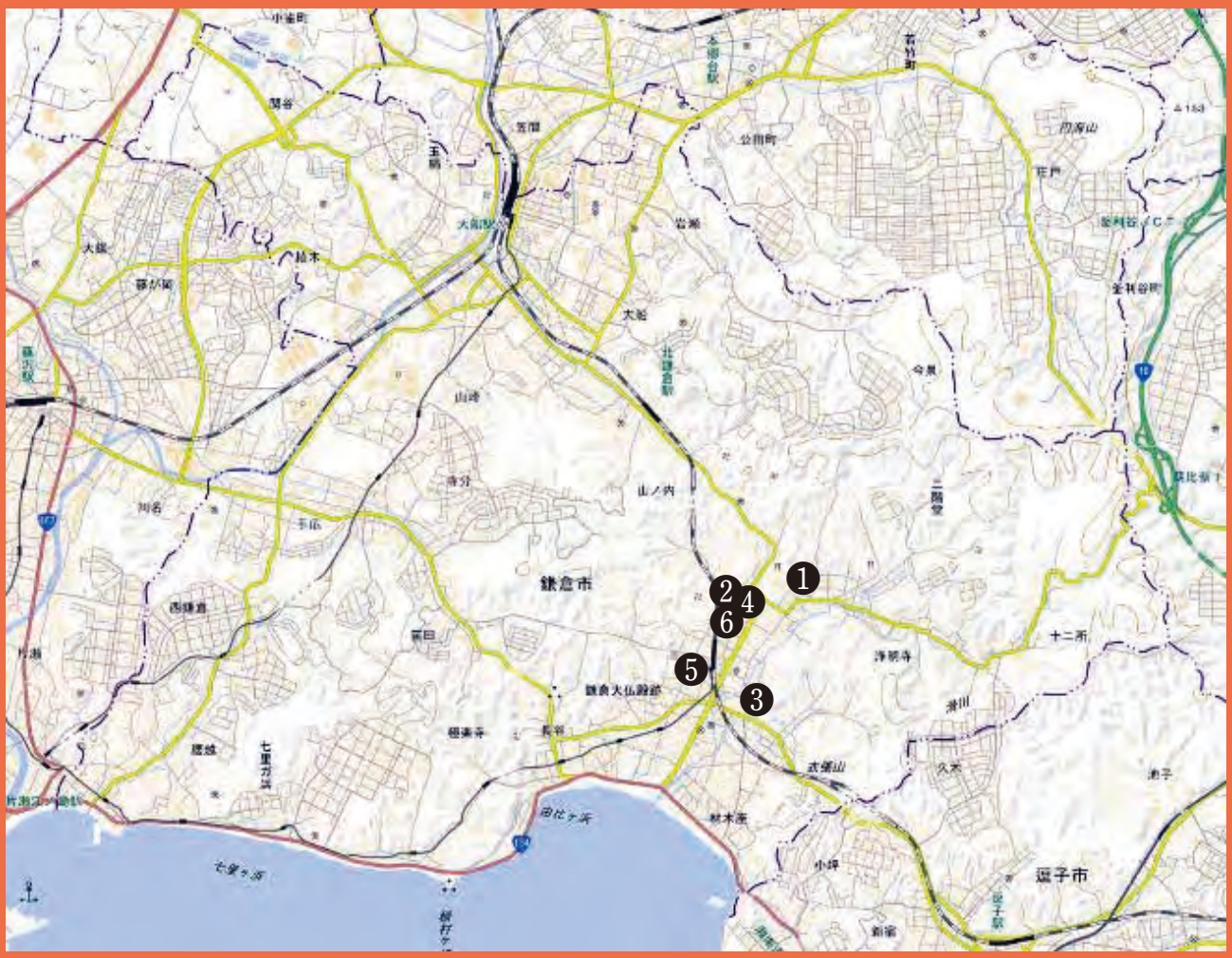
6. *Hakuji* White Porcelain Pot Excavated at Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun Site

These artifacts are fragments of a Chinese *hakuji* white porcelain pot excavated at the Wakamiya-Oji-Shuhen-Isekigun site/ruins near Wakamiya-Oji Street (part of 218-3, Yukinoshita 1-chome). Inscribed in Indian ink on a fragment of the pot's bottom is "Totsuna," which is believed to be the signature of a Song dynasty merchant group that engaged in trade between Japan and China (Song at the time) during the Kamakura period. It is the first example of such an excavation in Kamakura.

The part of the bottom with India ink inscribed on it, a fragment of the pot's body adjoining that part, and fragments surmised to be part of the same unit based on a comparison of pottery clay and glaze were all discovered. The bottom half of the pot's body contains a lotus petal design, with several deeply engraved lines running across its upper half. It is inferred to have been produced in the vicinity of Guangdong Province, China around the latter 11th to early 12th century. The diameter of the bottom of the pot exceeds 11cm, likely making it a sizeable masterpiece even when compared to other *hakuji* white porcelain pots imported into Japan.

Examples of excavated ceramics inscribed with "Tsuna" are concentrated in Hakata from the Heian period to the onset of the Kamakura period. This lends credence to the theory that not only were Song dynasty merchants active in Hakata, but trade between Japan and Song (China) was also conducted predominantly in Hakata. This recent excavation in Kamakura of artifacts similar to those in Hakata could be considered proof that Sino-Japanese trade conducted between Song and Hakata extended to Kamakura. This pot could therefore be labeled a valuable artifact that indicates the presence of a trade route from Song to Hakata and then on to Kamakura, also touching upon the possibility that trade ships directly entered ports at Kamakura.

本書掲載の調査地点



掲載遺跡名称及び所在地一覧（国土地理院地図を基に作成）

1　大倉幕府周辺遺跡群　（雪ノ下三丁目 660 番 3 他 9 筆）

2　若宮大路周辺遺跡群　（雪ノ下一丁目 120 番 1 の一部）

3　小町大路東遺跡　（大町一丁目 1174 番、1175 番 1）

4　若宮大路周辺遺跡群　（雪ノ下一丁目 209 番 4）

5　若宮大路周辺遺跡群　（御成町 763 番 4 の一部）

6　若宮大路周辺遺跡群　（雪ノ下一丁目 218 番 3 の一部）

鎌倉の埋蔵文化財 27

発　行　日　　令和6年(2024年)3月29日

編集・発行　　鎌倉市教育委員会　文化財課

〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号

電話：0467-61-3857　FAX：0467-23-1085

E-mail：bunkazai@city.kamakura.kanagawa.jp

印　　刷　　株式会社ポートサイド印刷